ミュージカル・ハイライト

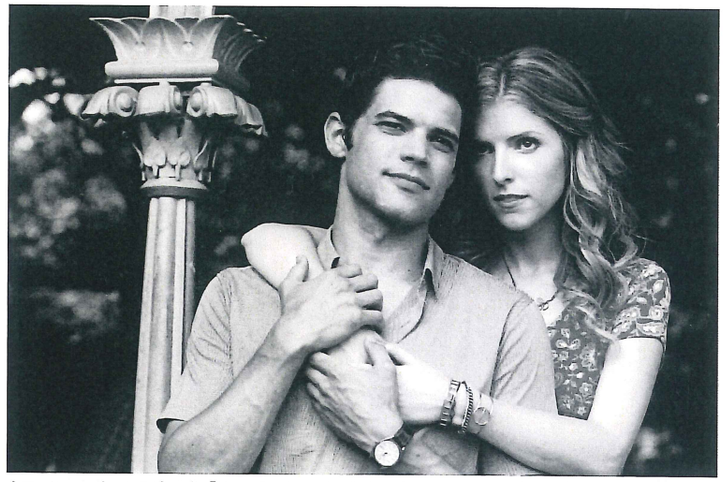
萩尾瞳 HAGIO HITOMI

No.250

富山で『ショウ・ボート』

北陸新幹線開通の日、富山に『ショウ・ボート』を見に行った。オーバード・ホール名作ミュージカル上演シリーズの第5弾で、ついにミュージカル史のエポックとなった'27年初演の名作登場である。'95年にリバイバル上演されたヴァージョンをベースにしているため、「ハロルド・プリンス版日本初演」と銘打たれている。

幕が開いた途端、びっくり。なんとショウ・ボートがほぼ丸ごと舞台に作られているのだ。しかも、回って裏側まで見せる。なんとも贅沢。物語は、ミシシッピ川を上り下りするショウ・ボートの船長の娘マグノリア（土居裕子）を中心に40年の歳月を描いたもの。土居の歌唱力はさすが。ヒロインと恋に落ちるゲイロード役の岡幸二郎がまたいい。ヒロインの姉的存在ジュリーを演じた剣幸はじめ魅力的な実力派が揃ったうえで、地元富山のオーディション組も参加した華やかで見応えある舞台だ。再演や東京公演などしてほしいと思うけれど、実現は難しいらしい。つくづく、もったいない。



オフ・ミュージカルの映画化『ラスト5イヤーズ』（ブロードメディア・スタジオ配給、公開中）
© THE LAST FIVE YEARS THE MOTION PICTURE LLC

オフ・ミュージカルの映画化『ラスト5イヤーズ』

オフ・ブロードウェイから生まれた珠玉のミュージカル『ラスト5イヤーズ』が、ついに映画化（ブロードメディア・スタジオ配給）された。そういえば、このミュージカル、前出のハロルド・プリンスに「今度、僕の娘（デイジー）が演出するんだよ」と言われて見に行ったのだった。ついでに言えば、プリンスはデイジーの推薦でミュージカル『パレード』（'99年）の作曲に新鋭のジェイソン・ロバート・ブラウンを起用、彼にトニー賞作曲賞をもたらした。デイジーはその前の「ソングス・フォー・ザ・ニュー・ワールド」でもジェイソンと組んでいるのだ。

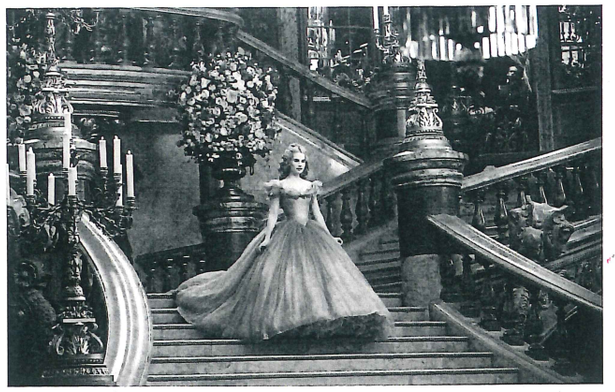
さて、『ラスト5イヤーズ』は'02年オフ・ブロードウェイ初演作。ジェイソン・ロバート・ブラウンの精緻で美しい曲で紡がれる魅力的な作品だ。日本では、山本耕史主演で'05年と'10年に上演されている。映画の主演は、映画版『インタウ・ザ・ウッズ』（'14）でシンデレラを演じたアナ・ケンドリックと、ブロードウェイの『ボニー&クライド』（'11）で注目され『ニュージーズ』（'12）でトニー・ノミネートされたジェレミー・ジョーダン。

物語は、一組の男女の5年間を描いたもの。作家志望のジェイミー（J・ジョーダン）と女優を目指すキャシー（A・ケンドリック）はマンハッタンの街角で出逢い、恋に落ち、そして結婚する。ジェイミーは作家として売れ始め、一方キャシーはなかなか芽が出ないまま。そんな日々のなか二人の気持ちはすれ違い始め、やがて別れの日が来る。

その5年間を、ジェイミーは出逢いから別れまでを順にたどり、キャシーは別れから出逢いまでに逆行する、という具合に、2人に流れる時間を逆から描いているのが、ポイント。2人の時間が一致するのは、結婚式の日だけ。この時間軸の大胆な設定が恋の切なさをいっそう深くしているのだ。舞台ならではの手法だな、と思っていたのだけれど、どっこい、素敵に映像化されているのだった。

ストーリーの運びは、ほぼ舞台のまま。オープニングは、キャシーが歌うナンバー「スティル・ハーティング」から。映像ならではのリアリズムも興味深い。二人の暮らしぶり、周囲の光景。また、キャシーが出演するサマー・ストック（地方の夏公演）の様子や、ブロードウェイどまんなかでオーディションに落ちたことを嘆くくだりなど、ミュージカル・ファンなら興味をそそられそう。

ジェイミーが去り、キャシーが恋の始まりに顔を輝かせるラスト・シーンは、詳しくは言わないけれど、とてもうまく見せてくれる。でも、この作品の最大の魅力は、なんといっても楽曲の美しさ。だから、何度も見たくなってしまう。リチャード・ラグラヴェーネーズ監督。



映像にうっとり『シンデレラ』（ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン配給、公開中）
©Disney Enterprises, Inc. All Rights Reserved.

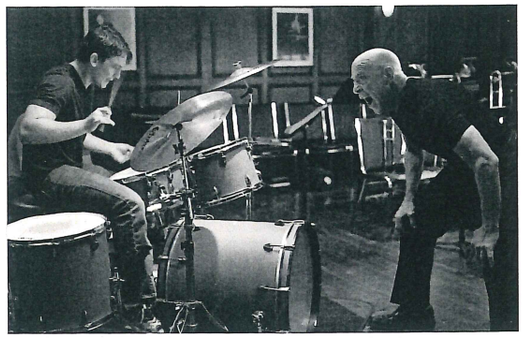
ゴージャス、実写版『シンデレラ』

ディズニー・プリンセスの、というより、プリンセス・ストーリーの原点とも言うべきシンデレラの物語が実写で映画化された（ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン配給）。物語はご存知の通りだが、ケネス・ブラナーが監督しているだけに現代的なアダプテーションも利いている。アニメ版とは異なりミュージカルではないけれど、美しい映像とそれを彩るBGMがロマンティックで、うっとり酔わされる作品になっている。

主人公エラ（リリー・ジェームズ）は、母の死後父の再婚で継母（ケイト・ブランシェット）と義姉妹（ソフィー・マクシェラ、ホリディ・グレンジャー）を迎える。父が急死後、継母たちはエラをこき使い始める。お城の舞踏会へも行けないエラの前にゴッドマザーの妖精（ヘレナ・ボナム・カーター）が現われ、と今更語るまでもないお話。

でも、キャラクターは現代的にきちんと描き込まれている。エラは、母から言われた「勇気と優しさ」で道を切り開いていく前向きなキャラ。そもそも、王子（リチャード・マッデイン）との出逢いは舞踏会より前、森の中でエラが馬を駆っていた時なのだ。身分も知らず惹かれ合った2人が、やがて再会し結ばれるという流れ。継母も単なる性悪ではなく、贅沢を維持するため手を尽くすクレバーな策士で、なんだか哀しくもあるキャラ。ブランシェットが演じるこの役は、もしかしたら作品中一番の引力かも。王子も意外にしっかり者だったり、人物像にも厚みが出ているのが実写版らしい。

とはいえ、最高の見ものはやはり魔法のシーン。フェアリーのおまじない言葉は、お約束の「ビビディ・バビディ・ブー」。かぼちゃが馬車に、シンデレラが豪華なドレス姿に変身するところは、CGだと分かっていてもワクワクする。ワクワクといえばエンドロールも。ここで流れる歌は、アニメ版のテーマ曲「夢はひそかに」。この曲、日本語吹替版だけ、主人公2人の声を吹きかえた高畑充希と城田優のデュエットになっている。



鬼気迫る演奏シーン『セッション』（ギャガ配給、公開中）
© 2013 WHIPLASH, LLC. ALL RIGHTS RESERVED

圧倒の演奏『セッション』

演奏家を描いた映画はいくつもあるけれど、それらとは一線を画する大胆で斬新な映画が『セッション』（ギャガ配給）。偉大なドラマーを目指し名門音楽院に入ったニーマン（マイルズ・テラー）は、フレッチャー教授（J・K・シモンズ）の目に留まろうと必死だ。教授が指揮するバンドに加われば、一流への道が開けたも同然だからだ。ある日、教授に言われバンドのレッスンに加わった彼は、鬼のような教授に支配され始める。

罵詈雑言の嵐が吹き荒れるレッスンだが、ニーマンは耐え練習に励み続ける。ついに彼は主奏者に抜擢されるが、それも長くは続かずやがて見捨てられる。才能はあるが姑息でのし上がるためには恋人さえ捨てるニーマンと、自分の求める音のためなら人を傷つけても平気な教授。その二人が決裂の後、反目し合いながらも、ひょんなことから同じ舞台でセッションすることに。9分以上続くクライマックスのジャズ・セッションは手に汗握る迫力。まさに音楽のボクシングといった作品で、いっぱいのジャズも楽しめる。

（映画・演劇評論家）